

スイート・ホーム

原田マハ

あけましておめでとうございます。みなさんは今年1年、どんな年にしたいですか？私は昨年よりもたくさんの本を読むことを目標にしようと思っています。あと、甘いものもたくさん食べたいなあ...これは目標というより願望です。笑

そんな今、ぴったりの小説を見つけました。美術関係の小説が多い原田マハさんですが、今回はひと味違います。舞台は宝塚にある小さな洋菓子店。駅前からバスに乗って、ゆるやかなカーブをのぼって、少し歩いたところにあります。途中の橋から遠くの街並を見ると、まるで秘密の宝箱をのぞき見したような気分。お店のあたりに来ると、甘い香りがします。秋にはキンモクセイの香りもする、すてきなお店です。1作目、表題作の「スイート・ホーム」ではこの店の長女、陽皆が主人公。両親がお店をしていて、妹が1人います。好きな人ができて、交際した後、彼が実家に挨拶にやってきて...というお話。街の景色や人、家族との何気ない会話に、ほっと安心できます。短編集になっていて、他の登場人物のサイドストーリーも堪能できます。美味しそうな料理、ケーキにも注目です！

ちなみに表紙はアンディー・ウォーホルの「Multi layered Cake on Stand」。とてもかわいい表紙で、読む前からワクワクすること間違いなしです。

神戸周辺では洋菓子店が多く見受けられます。時代を遡ること150年、開港によって神戸には数々の洋菓子がもたらされました。1897年に神戸風月堂が開業。その後、ゴンチャロフ、モロゾフ、ユーハイム、エーデルワイス...と続き、洋菓子文化が形成・定着したようです。ナショナルブランドと呼ばれる全国展開の洋菓子メーカーだけでなく、みなさんのお家の近くにあるような、中規模～小規模店も神戸の洋菓子文化では大きな役割を担っています。百貨店に行かなくてもケーキが買えるのは贅沢なことだな、と改めて思いました。

いつも美味しいケーキが食べられるのは、作ってくれているパティシエのおかげ。そして彼らが使うお菓子作りの道具のおかげでもあります。現在、竹中大工道具館では「洋菓子の道具たち」と題して、型を中心とした製菓器具コレクションを展示しています。芸術品のような道具を見て、完成形の想像をしてみたり、展示を見終わったあとにスイーツ巡りをしてみたい...。私も見に行ってみようと思います！

原田マハ（はらだ・まは）

1962年、東京都出身。関西学院大学、早稲田大学卒業。アートコンサルティング、キュレーターを経てデビュー。2012年『楽園のカンヴァス』で第25回山本周五郎賞を、2017年『リーチ先生』で第36回新田次郎文学賞を受賞。

アンディー・ウォーホル

1928年-1987年、アメリカ出身の画家、映画製作者。マリリン・モンローの写真を下地にしたり、キャンベルスープ缶のラベルを画面いっぱいに並べたシルクスクリーンの作品などを発表。ポップアートの巨匠。

洋菓子の道具たち

-型で味わうお菓子の歴史-

会場：竹中大工道具館 1Fホール

会期：2018年12月15日(土)～2019年1月27日(日)

開催時間：9：30～16：30(入場は16：00まで)

入館料：大高生300円、中学生以下無料

